

世界への愛

——アレントにおける誕生、活動、教育——

出雲春明

はじめに

今回は広い世界をあなたにお届けしたいのです。やっとのこと、本当に最近になって、私は世界を心より愛し始めました。今ようやく、世界を愛することができるのです。感謝の気持ちから、今度の政治理論に関する私の作品を「世界愛 (Amor Mundi)」と呼びたいと考えています⁽¹⁾。

これは、ハンナ・アレントが恩師カール・ヤスパースに宛てた一九五五年八月六日付の書簡である。ここで言われている「今度の政治理論に関する私の作品」とは一九五八年に公刊されることになる「人間の条件」⁽²⁾のことを指しており、それが「世界愛」と表現されている。そして、翌年四月にはこの著作のもととなる講義「活動的生 (vita activa)」がシカゴ大学において開講されることになる。だが、それにもかかわらずアレントは「人間の条件」においてこの「世界愛」という言葉を用いて議論を展開することはなかった。とは言っても、アレントは

著作の形成過程においてこの概念を破棄したと我々が結論づけることは性急にすぎたであろう。なぜなら、一九六三年にシカゴ大学において行われた講義「政治への導き (Introduction into Politics)」にこの「世界愛」という言葉が確認できるからである。このことを鑑みるに、やはり「人間の条件」には世界愛という概念が通奏低音として鳴り響いていると見なすべきであろう。本稿の課題は、主に「人間の条件」からこの世界愛という概念を析出することである⁽³⁾。そして、そのためにはこの著作を貫く主要関心を明らかにすることが必要である。そこで我々はまずアレントが愛の問題に正面から取り組んだ著作であり、彼女の後の思想的枠組みの基礎とみなしうる学位論文『アウグステイヌスにおける愛の概念』(一九二九年)⁽⁴⁾を概観し、そこで彼女が見出した問題を視野に収めつつ、『人間の条件』の考察に移行することにする。

一、隣人の有意性

学位論文の序文では、後々まで彼女の思想的関心を引きつけたテーマがすでに提示されている。それは「隣人の有意性 (Relevanz der Nächsten)」―人間が各々特異な個でありながらも、他者との関係から免れないという「逆説的な複数性」―を廻る問である。アレントは、時間的世界からの超出という救済を欲求しつつも、世界の内での人々の具体的な出会いの問題を絶えず視野に収めているアウグスティヌスを手掛かりとして考察を進める。

この論文では、まずアウグスティヌスの愛が「欲求としての愛 (amor qua appetitus)」であることが指摘される。アレントによれば、「欲求はそれを衝き動かす予め対象として与えられた特定のものに従って規定可能」(LA: 7)であり、欲求対象が非本来的であるならば「食欲 (cupiditas)」であり、本来的ならば「神愛 (caritas)」である。そして、非本来的対象は「現世 (saeculum)」という意味での「世界 (Welt)」のことである。その「世界は宇宙 (Kosmos) に対するものとして、人々によって構成される人間の世界として理解される」(LA: 39)。この世界は神の創造した「天地 (coelum et terra)」と区別されており、人間の「自発的行為 (nostra voluntates)」によって構成された「習慣 (consuetudo)」の領域である (LA: 42-5)。「世界が世界となりえるのは、人間が自らの純粹な被造性に依存せず、自立して世界を作り、愛し始めることによってである」(LA: 44)。

しかし、この世界は被造物たる人間の手によるものであり、それゆえ「…時的・時間的 (temporal)」なものに過ぎず、所有した瞬間に常に人々は「喪失の恐れ」に脅かされることになる (LA: 78)。現世的なものの移ろいやすさの故に、そこに帰属する者は「不確かさ (Unsicherheit)」に囚われ「自己喪失」に陥っている (LA: 8)。

このような現世の生は「死によって不断に脅かされている生」(ibid.)であり、此の世の存在者達は「被造物 (creatura)」にすぎず、「存在者はどれも創られたもの」であり「存在自体ではなく、存在との関係に与っているだけに過ぎない」(LA: 35)。この自覚によって、人間は本来的欲求対象たる神 (存在自体) へと転換する。それは「創造者への帰還 (redire ad Creatorem)」の志向であり、その成就によって人間は「生きながらの死 (mors vivas)」⁴、又は死すべき生 (via mortalis) を超克した「至福の生 (beata vita)」(ibid.) に到達する。神愛が欲求する至福の生は現世を超えて臨むべき「絶対的未来」であると同時に、自らの起源である「絶対的過去」でもある。つまり、それは「それ」から、(Von-wo-zus) であり、同時に「そこ」へ (Woranhin) でもある (LA: 64)。「存在を永遠的なものとして捉えるなら、時間的に存在するものにとって始まりと終わりとは、自らが由来する存在への関わりの中で交換しうる」のであり、「存在は過去の最果ての限界であり、同時に極限の未来の限界でもある」(ibid.)。アウグスティヌスを本来的欲求に差し向けた友人の死の衝撃に関する述懐、「私が私自身にとって問題となった (quaestio mihi

tactus sum)』⁵ (LA: II) は、変化を免れえない現世を超えた永遠の希求であると同時に、自己の起源の探求を意味している。

以上のように、世界は人間の手になるが故に時間的儚さを免れえず、その喪失への恐れこそが人をして神愛へと改心させる契機となる。しかし、アレントはここで「隣人の有意性」という問題をめぐって、一つの障害を見出している。それは、現世が至福の生の「享受 (fruit)」のために「使用 (uti)」される手段に過ぎず、固有の意味を決して有しえないということである。アウグスティヌスの言葉を用いるのならば、「我々は、この死すべき様態の生において……そこでこそ幸福になれる国に帰ろうと願うのならば、此の世を用いるべきであって、此の世を享受してはならない」⁶。従って、「私は他者を世界の内の具体的な出会いにおいて愛するのではなく、他者の内なるその被造性を愛する」にすぎないということになる。結局、「愛されるものは誰も、神への愛のための単なる契機ではない」のであり、「隣人の隣人としての意義」は失われ、人間は皆「孤立の内に取り残される」ことになる (LA: 70-2)。アレントは、こうした傾向がアウグスティヌスの思想を全面的に覆っているのではなく、「神の国」という「共同信仰 (communis fides)」における、「地の国」の罪の共同性を退けた新たな共同体の設立可能性をも指摘している。しかし、救済に主軸が置かれるやいなや、地の国であれ神の国であれ此の世の共同体は超克されねばならないのであり、世界における共同性の固有の意味は再び揺らぐことになり、「隣人の隣人としての意義」が失われるという危

険性も同時に指摘されている。アレントは現世的なものの可死性の自覚を契機として本来性へと跳躍するという構造をアウグスティヌスの欲求としての愛に認めているのであるが、そこでは一切の現世的関わりに非本来性の烙印が押されることになる。こうした学位論文での考察から、アレントは時間的存在者間の本来的共同性の探究という課題を引き受けることになる。

二、誕生、そして世界への氣遣い

我々は「世界愛」の概念を闡明するために、まず学位論文を通じて『人間の条件』の主要な問題関心を析出することに努めた。それは「隣人の有意性」をめぐる問題であるが、学位論文では本来性への跳躍によって「隣人の隣人としての意義」が解消されてしまうことに危険性が見出されていた。此の世での人間の営みが非本来的なものにほかならず、我々の住む世界が我々にとってよそよしいものとして現れているという状況、その淵源を求めればプラトンの二世界論にまで遡ることができ、であろうが、アレントはこの動向が近代において頂点に達したと考える。アレントはこの動向を「世界疎外 (world alienation)」と呼称し、『人間の条件』において議論すべき問題を「今日の世界疎外、すなわち地球から宇宙へのフライトと世界から自己自身へのフライトという二重のフライトをその根源にまで遡って跡づけることである」(HC: 9) としている。本稿冒頭で引用しておいたヤスパースへの書簡において、アレント

は「今回は広い世界をあなたにお届けしたいのです。やっつ、このことで、本当に最近になって、私は世界を心より愛し始めました。今、ようやく、世界を愛することができのです」¹¹⁴と披露していた。つまり、「人間の条件」は世界疎外という状況の克服を期して著されたものであり、それゆえ世界における人間の営みの諸相の系譜を辿り、その根本を問い直すという道筋を辿っているのである(『人間の条件』のドイツ語版のタイトルはそのもととなった講義と同じ「活動的生 (vita activa)』である)。そして、この著作は問題関心のみならず、思考枠組みも学位論文に多くを拠っている。なぜなら、この儂い世界からの救済として永遠への超出を志向しながらも、絶えず隣人の有意性の問題に立ち返るアウグスティヌスの姿勢をアレントは高く評価するからである。しかし、アレントはもはや救済として世界からの超出を選択することはできない。ではいかにしてこの世界において本来の営みが可能となるのであろうか。アレントは、アウグスティヌスにおいて本来性を証する「自らが由来する存在への関わり」を「誕生 (Birth)」という此の世的出来事への関わりへと変奏することによってそれを論じようとするのである。この誕生概念は世界愛と相互関係にあるものであり、それを理解する上で決定的な役割を担っている。そこでまずは『人間の条件』において誕生がどのように語られているかを確認しておこう。

他者からの、世界からの離脱を意味する死とは逆に、誕生は他者との、世界との関わりの始まりを告げる根源的経験であ

る。この誕生は人間を含むあらゆる生物を制約する事実であるものの、人間の誕生は新しい者の到来と見なされうるといふ点で他の生物のそれと際立って異なっている。¹¹⁵生まれ出づる者達 (Birth) はすべて過去に存在した人、現在存在している人、将来存在するであろう人と同じではない。一方で、他の動物達にとつて子供とは自らの複製であり、種族保存のための交換部品にすぎない。彼らは自然の恒久的な循環に融解しているのであり、誕生と死そしてその間に営まれる生の一回性についても問うこともなく、「労働 (Labor)」、「消費」、「休息、生殖を果てしなく繰り返すだけである。しかし、人間はこの果てしない繰り返しに対して、「世界」を「制作」するという仕方に対抗することが可能である。アレントにおける「世界」は多義性を備えた概念であるが、ここで言う世界とは耐久性を有した人工物(建築物、道具、芸術作品等)のことである。必ず「消費」を伴う労働の産物とは異なつて、基本的に「使用」に供される制作の産物¹¹⁶は同一性を保ち、その制作者の寿命を超えて持続することさえある。「世界の耐久性と相対的な永続性が人間の現れと消失とを可能にする。世界は個人がそこに現れる前から存在し、また消え去った後にも存在し続けるであろう」(HC: 97)。この耐久性こそが人間の営みの基盤であり、先の人間的な誕生理解も世界によって可能となっている。「世界の諸物は人間の生を安定化させる機能を持つ……人々は絶えず変化するというその性質にもかかわらず、同じ椅子、同じ食卓に関係づけられていることによつて、彼らの同一性すなわちアイデンティティを回復

することができ(HC: 137)。人間は自然界の流動性から独立した世界の耐久性を自己理解の参照とするのである。しかし、その世界の耐久性も絶対的なものではなく、いずれ消滅せざるをえない。ここでの世界の位置づけは学位論文での考察が引き継がれていることが確認できる。従って、アレントの言う「世界愛」とは少なくとも自らに先立って存在している世界を無批判に肯定し、そこに従属埋没することではないということになる。アウグスティヌスは世界での人間の生の基盤の儂さ故に、固有の自己を回復するために絶対的基盤を追求するに至った。それに対してアレントは、彼岸の絶対者ではなく、此の世的な出来事である誕生に焦点を当て、それを通じて人々の間での交わりである「活動(action)」を論じていく。

人間は彼の現れに先立って存在する世界に誕生するのであるが、その新たな者はまさに彼が「一つの新しい始まり」であるがゆえに、他者の共同体における異邦人(stranger)として到来する。そして、その際に、この新参者は旧来の他者達に次のように問い掛けられることになる。「あなたは誰であるか(who)?」。この誰性は新参者であることに由来するその人の「特異性(uniqueness)」のことである。しかし、「その人が何(what)であるか—その人が示したり隠したりできるその人の特質、才能、能力、欠陥—(HC: 179)」である既存の世界のコードでは、他者の他者性を推し量ることはできない。何性と誰性は質的に異なっているからである。それどころか、これは自分自身では解答不可能であり、その探求はアウグス

ティヌスが言うところの「人間そのものであるところの大きな深淵(grande profundum)」(HC: 10-1)に直面し、挫折せざるをえない。アウグスティヌスにとってこの挫折は神の「恩寵(Gratia)」によって摂取されることによってのみ突破可能である。一方、アレントにおいて、この挫折の突破は他者との「活動」を通じて可能とされるのであり、しかもこの挫折ゆえに人々は活動へと促されるのである。つまり、誰性は「その人が語る言葉と遂行する行為に暗示される」のみである(HC: 179ff)。ただし、この活動は親しき者達の間で営まれるつきあいは異なる。なぜなら、この親密な交わりにおいて「誰であるか」という問いは顕在化することがないからである。一方、異邦人の到来は常に既存の世界を動揺させるであろう。その結果、人々はある共同体の構成員から個へと引き戻されることになる。

一般に受け入れられていることを打ち破り、非日常的なものの(the extraordinary)へと到達するのは活動の本性による。その場合、一般的日常生活で真実とされるどのようなものもはや、そうでなくなるのは、存在するもの一切が特異的であり、唯一のものだからである(HC: 205)。

既存の世界の住人にとって新参者が異邦人であるのと同様に、新参者にとっても既存の世界の住人達はそれぞれ異邦人として現れる。このように彼らが相互に新たな者として承認しあ

うからこそ、「誰であるか?」と問い掛け合うことが可能になるのであり、既存の世界にはなかったその新しさを示すために互いに活動するのである。

語り、活動しつつ、我々は自らを我々が世界に生まれる前から存在していた人々の世界へ挿入する。この挿入は第二の誕生の如きもので、そうして我々は誕生存在 (Geborenssein) という裸の事実を確証し、いわばこの事実に対する責任を自らに引き受ける。……この挿入は我々が仲間に加わろうとする他者の存在によって刺激されたものである。……その衝動は、我々が生まれたときに世界に持ち込んだ「始まり」から生じている (HC: 176-7; VA: 215)。

新参者は新たな始まりを告げる存在である。しかし、その特異性は彼らが他者から離在しているならば、あるいは既存の共同体に従属埋没しているならば、顕在化することはない。それは既存の世界に自らを異邦人として挿入する、つまりは活動することによって初めて証されるのである。従って、隣人の有意性は、既存の共同体内部の一般的生活から自然的に生起するものでは決してなく、新たな者の到来によって自明視されていた在り方が一旦解体され、相互に特異な個として応答し合っている。つまり、その特異性を暴露し合うことによって立ち現れてくる。つまり、アレントは「固有の自己」を担保するものを絶対者ではなく、誕生による現世への現れに求め、その回復を絶対者への

帰還ではなく、他者との活動に求めることによって、現世における共同性の意味を剔抉するのである。そして、ここにおける共同性が成立しているのは、人工物により構成される静的な世界ではなく、「人間関係の〈網の目〉(“web” of human relationship)」(HC: 183) と言われるところの動的な世界である。

先に指摘したように、アレントは学位論文での分析を引き継ぎ、恒久的な自然と此の世での人間の生の基盤である世界を区別する。しかし、この世界は人間の手によるものであるが故に、滅びが宿命づけられている。アウグスティヌスはこの「喪失の恐怖」ゆえに、時間的世界から超出し、「創造者への帰還」という救済を希求したのであるが、それは世界内の共同存在を破棄する危険性を孕んでいたのであった。では、絶対者を主題化することのないアレントはいかにして世界の危機に取り組み得たのだろうか。アレントは言う。「共通世界は、それが公的に現れている限りにのみ、世代の流れを生き延びることができる」(HC: 55)。アレントはあくまでも世界において他者達と活動することを救済策として提示する。そして、「人間の条件」の第五章「活動」の結論部では次のように語られる。

人間事象の領域である世界は、そのまま放置すれば自然に破滅する。それを救う奇跡は究極的には人間の出生という事実なのであり、活動の能力も存在論的にはこの出生に基づく。言い換えれば、奇跡とは新しい人々の誕生であり、新しい始まり、すなわち人々の誕生によって可能となる活

動なのである。この能力の十全な経験のみが、人間事象に信仰と希望を与えることができる (HC: 247)。

活動することによって既存の世界に新しさが挿入される。そして、新参者と彼を迎え入れる者達は双方とも互いにとつて異邦人であるから、もし彼らが活動しなければ、人々は完全に離散して世界は消滅し、他の動物が投げ込まれているのと同じ自然に回帰するであろう。新しさを受け入れず、既存の世界に固執し同一性に自閉するならば、世界は時間的存在者である人間の手によっているが故に、崩壊せざるをえないであろう。この宿命を免れるためには、世界は常に新たな者の到来によって更新され続けなければならない。それゆえに、この章は「この世界に対する信仰と希望の、おそらく最も栄光ある最も簡潔な表現」として「我々の下に子供が生まれた」(ibid.) という福音の言葉で締めくくられるのである。ここでアレントが意識しているものが、キリスト教における「信仰、希望、愛」(「コリ：13. 8」の三位一体であることは容易に看取可能である。また、ここから学位論文における考察が「人間の条件」の骨子となつていることも理解可能であろう。しかし、ここで留意すべきなのは「信仰、希望、愛」のうち、愛のみが直接言及されていないことである。代わりにアレントは「我々の下に子供が生まれた」という言葉を引用している。ここで我々は世界愛を究明するために、子供達、すなわち新たに生まれ出づる者達に対する構えについて確認しておく必要がある。そして、そのためにアレ

トにおける教育の問題を見ていこう。

三、生まれ出づる者達のために

アレントがこの問題を取り扱っている論文は「教育における危機」(一九五八年)⁽⁴⁾である。これは「人間の条件」と同年に公刊されたのみならず、アレント自らの手による論文集『過去と未来の間』(一九六一年第一版)に収録されていることから、「人間の条件」における考察との連続性ならびにその重要性をうかがわせる論文である。アレントはこの論文を以下のように書き起こす。

あらゆる所で、またほとんどすべての生活領域で現代世界を襲っている一般的な危機は、国によってその現れ方が様々であり、巻き込んでいる地域も異なり、様々な形をとっている。アメリカでは、その最も特徴的で暗示的な局面の一つは、教育の危機として繰り返し現れている。それは少なくともここ一〇年というものの第一級の政治問題となつている (CE: 173)。

アレントによれば、ここで言われている危機は学力低下やそれに歯止めを掛ける有効な手だてが見出されていないことから明らかになっている。そして、アレントはこの危機を深刻に受け止め、「教育の危機など世紀の大問題とは無関係な局所的現象

である」(CE: 174)と見なすのは誤りであり、そこには「どうしてうちの子は読み書きがダメなのかしら」という困った問題以上のもが含まれている」(ibid.)と指摘する。「何であれ一國で起きうることは近い将来ほとんどすべての國で同様に起きうるということが、二〇世紀の一般法則であると見なせる」(ibid.)というアレントの発言を確認するかのように、我が國でも教育の危機が取り沙汰されるようになって久しい。従って、そこには知識の教授方法の不備以上の何かが伏在していると見なされうる。そして、それこそが素人に過ぎない自らが教育の危機について取り扱う理由であるとアレントは言う。「危機——見せかけを引き裂き先人見を消失させる——の事実そのものが、露わになっている問題の本質を探究し突き止める機会を与えらる」(ibid.)。そして、危機によって露わにされる「教育の本質」とは出生性 (natality)、つまり人間が世界の中に生まれ、くるという事実である」(ibid.)。教育は知識を教授すること以上に、新たに生まれてきた者達を我々の住む世界に迎え入れることである。そして、誕生することによって人は既存の世界と出会うのである。この教育の本質は「人間の条件」第一節ですでに述べられていた。

活動と同様に労働と仕事もまた、それらが異邦人として世界に生まれる新参者達の持続的流入のために世界を与え保持し、それを見越して考慮に入れるという課題を持つ限りにおいて、出生性に根ざしている (HC: 9)。

アレントにとつて教育の危機が局所的現象でありえず、世紀の大問題として映じるのは、それが引き起こしているのが単なる子供達の学力低下ではなく、彼らと世界との間のずれ違ひであるという彼女の診断に基づいている。前節で指摘したように、アレントは近代固有の問題を「世界疎外」と規定する。世界へと人々を導く教育が危機にさらされることによって、世界のおよそそしきは個人の思想信条等の局所的条件によるものではなく、万人に等しく降りかかる普遍的問題となつていくことが露わにされたのである。先に確認したとおり、活動は、我々の足場であり住処である世界あつて初めて可能である。世界が我々にとつてよそよそしいものであるのなら、そこで営まれ、それを更新するための活動は不可能であり、世界は衰退に向かうしかない。従って、教育の危機は「第一級の政治問題」となるのである。

以上より、アレントが教育に求めるものも理解されるであろう。アレントは言う。「子供がまだ世界を知らないならば、彼は徐々に世界に導かれねばならない。子供が新参であるのなら、この新しいものが世界に照らしてその真価を発揮できるように配慮されねばならない」(CE: 189)。新しさは個人の放縱な振る舞いから生じるのではなく、まずもつて既存の世界に導かれそこに帰属することを条件に生じてくる。従って、教育は既存の世界について子供達に知らせ、そこに住む者としての自覚を促すものでなければならない。「子供と相對する場合、教師は

大人の住民の代表者であるかのごとく、子供に事細かに指し、語るののである。これが我々の世界だと」(Eid.)³¹⁾。こうした子供への構えこそが、我々の活動を後の世代へと引き継ぎ、「異邦人として世界に生まれる新参者達の持続的流入のために世界を与え保持し、それを見越して考慮に入れる」(HC:9)ことになる。アレントは「教育における危機」を以下のように締めくくる。

大人と子供の関係一般や、さらに一般的で正確な用語で言えば、出生の事実―我々は皆生まれることによって世界に到来し、また世界は誕生を通じて絶えず新しくなるという事実―に対する我々の態度は、我々全員に関わることであり、それゆえ教育学という特定の学問分野に委ねることのできない問題である。教育は、我々が世界を愛するか否か、すなわち世界を愛して世界への責任を引き受けるか否か、さらに更新なしには、すなわち若者達の新たな到来なしには滅びを免れない世界を救うか否かを決める分岐点である。教育はまた、我々が、自らの子供達を愛するか否か、つまり彼らを我々の世界から追放して放任に任せたりせず、あるいは我々には予見しえない何か新しいものを手にする機会を彼らの手から奪うこともせず、子供達を愛して共通の世界を新しくする使命への構えを前もって彼らにさせておけるか否かを決める分岐点でもある。(Eid.198―傍点引用者)。

ここで教育の要諦が「世界を愛するか否か」に求められており、さらに「子供達を愛するか否か」と相互的依存的な関係において捉えられている。世界の継続は新参者達が象徴し、彼らとの活動によってそこに挿入される「新しい始まり」によって保証されている。この点で、活動は世界への気遣いであり、そこには新参者達が各々一つの始まりを告げていることへの、彼らがこれからも到来するであろうことへの信仰と希望がある。そして、この信仰と希望は誕生を軸としているのであり、人々は愛をもって、新参者達を迎え入れ、同時に世界の将来のために応じ合うのである。

結びにかえて

世界愛とは何であったのか。端的に言えば、それは人々が自らの特異性を暴露し合い、それによって世界を更新する「活動(action)」それ自体である。また、それはアウグスティヌスにおいて超克されるべきとされた非本来的欲求たる「食欲」とは区別されるべきであろう。なぜなら、世界愛は現世的なものに対する愛着や無条件の肯定ではなく、その可死性を自覚し世界を不断に脅かす危機に対しての応答を意味するからである。「世界をあるがままに受け入れ、もっぱら現状を維持しようとする……態度は、政治においては破滅しかもたらさない。なぜならば、もし人間が介入し、変革し、新しいものを創造しようとした

意しなければ、世界全体も個々の事物も取り返しのかかぬままに時と共に滅びるほかないからである」(CE:192)。学位論文との関係を考慮に入れるならば、罪の共同体である「地の国」を克服し「神の国」を建立する構造とそれは類比的であると見なされうるのである。本稿第三節で引用しておいたように、活動することによって「我々は誕生存在 (Geborensein)」という裸の事実を確証し、「いわばこの事実に対する責任を自らに引き受ける」。(この誕生しているという事実とは、人間は皆新たな者として世界に到来するが故に)、世界を更新する可能性を付与されていることである。この可能性を投企し責任を引き受けるか否かは、同一性(既存の世界)に自閉せず活動に臨むことができるか否かに懸かっている。活動によって新たにされた世界も決して絶対的なものでなく、すぐさま旧きものとなるが、逆に言えばその可死性ゆえに万人に活動の可能性が開かれているのである。そして、我々は活動することによって世界を継続させ後の世代にこの可能性を残し続けるという責任の前に立たされているのである。最後に本稿冒頭で述べた一九六三年のシカゴ大学での講義録におけるアレントの発言を引用しておこう。

世界愛 (Amor mundi)「それは我々が生まれた世界への愛あるいは献身である。これが可能であるのは、我々が永遠に生きる」ことがないからである¹⁰。

注

本稿は、二〇〇八年一月四日に筑波大学において開催された第五九回日本倫理学会での自由課題発表会の原稿がもとになっている。

- (1) *Arendt/Jaspers Briefwechsel: 1926-1969*, herausgegeben von Lotte Kohler und Hans Saner, Piper, 1993, S. 301.
- (2) Arendt, H., *The Human Condition*, Intro. by Canovan, M., The University of Chicago Press, 1998. 以下「HC」を略記する。またドイツ語改訂版でも「*Vita activa oder tätigen Leben*, Piper, 2002.」を引用する際はVAと略記する。本稿を作成する上で参照した先行研究は以下の通りである。Young-Bruehl, Elizabeth, *Hannah Arendt: For Love of the World*, Yale University Press, 1982; Bernauer, James, "The Faith of Hannah Arendt: Amor Mundi and its Critique - Assimilation of Religious Experience" in ed. by James Bernauer, S. J., *Amor mundi: Explorations in the Faith and Thought of Hannah Arendt*, Martin Nijhoff Publishers, 1987; Boyle, P., "Evasive Neighbourliness: Hannah Arendt's Interpretation of Saint Augustine", in ed. by James Bernauer, S. J., *Amor mundi: Explorations in the Faith and Thought of Hannah Arendt*, Martin Nijhoff Publishers, 1987; Bowen-Moore, P., *Hannah Arendt's Philosophy of Natality*, St. Martin's Press, 1989.
- (3)

- (4) Arendt, H., *Der Liebesbegriff bei Augustin: Versuch einer Philosophischen Interpretation*, Berlin, 1929. 以下「LA」略記とする。
<http://memory.loc.gov/ammem/arendhtml/arendhome.html> を閲覧する。
- (5) アウグスティヌス『告白』(上)、服部英次郎訳、岩波文庫、一九七六年、IV・4・9。
 (いずも・しゅんめい 筑波大学大学院)
- (6) アウグスティヌス『キリスト教の教え』、アウグスティヌス著作集第六巻、加藤武訳、教文館、一九八八年、I・4・4。
- (7) *Arendt/Jaspers Briefwechsel: 1926-1969*, S. 301. (傍点引用者)
- (8) ただし、使用対象物ではない芸術作品は制作の産物の中でも特殊な位置づけを与えられている。
- (9) 『告白』(上) IV・14・21。
- (10) Arendt, H., "The Crisis in Education" in *Between Past and Future*, Penguin Books, 1993. 以下「CE」略記とする。
- (11) こゝに「子供に対する大人の態度」はアレントの「権威(authority)」「概念と密接に関わる。また、アレントが対等者間(大人と大人)の交わりを子供と大人との関係と区別してゐることも留意されるべきである。本稿で取り上げることのできなかつたこれらの問題は稿を改めて論じることにした。
- (12) Arendt, H., *Introduction into Politics*, University of Chicago (Fall course 1963), 023803.
 マンハッタン図書館のこゝへは米国議会図書館 HP の "The Hannah Arendt Papers at the Library of Congress"